大阪の社会福祉

2019.9
772

The social welfare in OSAKA

社会福祉法人 大阪市社会福祉協議会　http://www.osaka-sishakyo.jp

CONTENTS

元気通信　住之江区 海の町地域から
住民の声をていねいに聞き取りたい
～見守り・災害避難支援アンケート作戦～ ―― 2
居場所いろいろ　とも淀キッチン（淀川区）
こどものためのサードプレイス　～社交性が身につく食堂～ ―― 3
市社協　〈特集〉大阪市内の福祉活動の実践報告 福祉の今を知る！
本人の身近で意思決定を支援する ―― 4 5
施設協　人材確保・定着に向けた取組み
「施設と学校との懇談会」―― 6
第62回 大都市社会福祉施設協議会
大都市の社会福祉が目指す未来 ―― 6
市社協　令和元年度　大阪市社会福祉大会 ―― 7
はじめまして！こんにちは♪
NPO法人 地域自立支援推進協議会JOTO
障がいのある人と共に生きる地域社会の実現に向けて ―― 8

東成区

「在宅生活応援知恵袋」作成記念説明会&相談会

～リハビリから考える社会参加～

東成区社協は、7月31日、区在宅サービスセンターで「在宅生活応援知恵袋」作成記念の説明会&個別相談会を開催。区内の高齢者ら、約25人が参加した。

在宅生活応援知恵袋とは、2年前に結成された東成区リハビリテーション連絡会（以下、リハ連）と、区社協が協働して、掃除や洗濯、炊事など、家事の負担を軽くするための「暮らしの工夫」や、「自宅でできる体操」「ウォーキング」などを17ページにまとめた冊子だ。

説明会では、冊子の制作に携わったリハ連の作業療法士・河井賢一さんが、筋肉や関節などについてレクチャーするとともに、後半は個別相談コーナーを設け、日頃の悩みや疑問を専門職に直接聞ける機会となった。

（2・3面に続く）

「社会参加」と「リハビリ」の相談コーナー（奥）の待ち時間には参加者同士で交流

HB

夏休みの開放的な時間を若者たちはどう過ごしたのだろう。勉強を頑張った子ども、キャンプに行った子ども、ボランティアに参加した子どもなど、いろいろいるだろう▼高齢者施設の夏祭りに参加した高校生の女の子の感想だ。少ない人数の介護士さんが、たくさんの介護の必要な高齢者の状況を配慮しながら、笑顔で臨機応変に動き回っている様子に心を打たれたという▼話し方、食事のとり方、車いすの押し方、それを一人ひとり変えていることに気づいたというのだ。車いすも1台1台利用する人に合わせて違っていることにも気付いたと▼最近特に若者の進路としての介護人気が低落している。外国人を呼ぶことで急場をしのごうとか、消費税の値上げに合わせて、介護士の給与を引き上げるとか、小手先の手立てが切り札のように言われているが、そうではなく、介護の仕事の専門性の素晴らしさを伝えることが大切だろう▼楽しい夏祭りで、自分も楽しみながら、人の気づかない介護の仕事に感動した高校生がいたことに、私こそ心打たれた▼夏休みは若者の感性豊かな気づきを支える学びの場である。（石）

「大阪の社会福祉」は共同募金分配金を活用して発行しています。

（1面より続き）

いつまでも、家事は自分でやりたい

冊子作成のきっかけとなったのは、区の保健師とリハ連、区社協が協力して実施した、各地域での介護予防の啓発講座。その場に参加した高齢者251人にアンケートを実施した結果、「介護予防に関して取り組みたいことは？」に対する回答のトップ3は「家事」「体操」「ウォーキング」であった。

高齢者は膝や腰、肩の痛みや動きにくさが原因で、今までできた掃除、洗濯、買い物などに、負担やストレスを感じやすい。生活支援コーディネーターの島岡繁希さんは、そのストレスを「〝自分で家事ができる幸せ〟に変えたい」という想いから、冊子作成をリードした。

この日は、リハビリのプロである河井さんが、冊子内容に沿って、身体に負担のない姿勢や動作を解説。「何のための体操か意識することが大切」「家事を続けていたら体のメンテナンスになる」などのアドバイスを送り、参加者は自身の身体にふれたり、動かしたりしながら聞き入っていた。個別相談会も好評で、不安げに参加した人も、最後は晴れやかな表情で帰っていった。

「膝のお皿、動くのわかりますか？」と作業療法士の河井さん

冊子のモデルは体操教室の卒業生たち

冊子は今年3月に完成。作成には、約3か月を要した。リハ連とともにアンケートを分析し、掲載内容を検討。リハ連の理学療法士・作業療法士らがページを分担した。

写真に協力したのは、リハ連と区社協との取組みのひとつで、2年以上続いている↖

元気通信

住之江区 海の町地域から

住民の声をていねいに聞き取りたい ～見守り・災害避難支援アンケート作戦～

快適で安全な生活の場をめざして1977年にまちびらきされた南港ポートタウン。そこは車両の進入が制限され、高層住宅、教育施設を爽やかでゆったりとした公園緑地が取り巻いている。

ファミリー層を中心に若い生活シーンが花咲いたこの地域も、40数年を経た今、高齢化が進み、日常の見守りや災害時の助け合いが住民の課題となっている。昨年の地震や台風の影響も重なり、その課題解決に向けて、地域社協や連合町会、民生委員などからなる「さざんか海の町協議会」が地域一体となり、区社協や地域包括支援センターとともに、活発な議論を重ねながら取り組んでいる。

受け取る住民の気持ちを考えながら活発に議論

緑に囲まれ高層住宅が建ち並ぶ

昨年から準備を進めてきた住民へのアンケート作戦の最終段階の会議が、7月27日、海の町社会福祉会館で開かれた。同協議会会長の小高秀昭さんが「かつて各町会を中心に機能してきた近所づきあいの延長にあるものとして、できるだけわかりやすい内容にした」というアンケートの原案を提案。普段の声かけ、災害時の安否確認、避難支援、見守りボランティア参加の意思を問う、4項目のアンケートで、高齢の方や外国籍の住民のことも配慮して漢字にはすべてルビが振られている。集まった12人のメンバーは一言一句を確認しながら、細部にわたる改善点などを出し合った。

アンケートの特徴は「記名式」であること。記名いただいた方への友愛訪問を予定するなど、その後のスケジュールも話し合われた。

アンケートは9月中旬に地域内約2500の全戸に配付され、翌月には集約される。

「アンケートをやりたい」と最初に申し出たという民生委員長の中川千鶴さんは「平成26年に戸別訪問をしたが、昨年は自然災害もあり、状況は変わってきている。住民の声をていねいに聞き取りながら、今回の取組みをきっかけに、地域全体のつながりを回復していきたい」と地域の新しい歩み出しへの思いと期待を語った。

↙体操教室の卒業生たちだ。工夫次第で、高い所にも手が届き、重いものが運べ、腰を痛めなくても靴下がはけることを、自らがモデルとなって示している。モデル協力者は、「私、載ってるねん！」と照れながらも、地元地域での冊子配布にも協力してくれているそうだ。

体操教室の卒業生は、ほかにもボランティア活動を始めたり、「歩こう会」を結成したりと積極的に活動しており、仲間づくりの面からも広がりを見せている。

冊子を手に説明する
生活支援コーディネーターの島岡さん

在宅生活応援知恵袋は
コチラから

「社会参加」という同じゴールをめざして

個別対応のリハビリ専門職と、高齢者の支え合いを推進する生活支援コーディネーターは、一見つながりづらい印象があるかもしれない。しかし、リハビリの専門職が、患者の機能回復において、「リハビリのゴール設定をどこにするか」と考えると、接点が見えてくる。

島岡さんは「例えば、リハビリで階段をスムーズに降りられるようになれば、その先に社会参加が可能になる。逆に、参加できる場に出かけ、交流すること自体がリハビリにもつながる」と語る。今後も共通するゴールに向かって連携しながら、知恵袋を各地域に伝えていくことを考えているという。

この日は相談コーナーの傍ら、集まった人同士で「一人暮らしの人同士で一緒にご飯を食べるような会ができたら」という声も。各参加者が日頃の暮らしのヒントを持ち帰るとともに、新たな仲間づくりにつながる兆しも垣間見えた。

居場所いろいろ －13－

こどものためのサードプレイス

～社交性が身につく食堂～

「とも淀キッチン♪」は、ひとり親家庭を支える淀川区母と子の共励会事業部が「『おばちゃん、おなか減った。ご飯食べさせて～』といえる環境が今はない。みんなでご飯を食べる楽しさを味わって欲しい」という理念のもと、「孤食」のこどもたちの成長を見守るために、平成29年に十三小学校前の空き店舗で始めた。

食事は冷凍食品を極力使わず手作りにこだわり、煮物や和えものなど現代のこどもたちが普段あまり食べないであろうものも提供している。

参加は基本こどもだけに限定している。親と一緒にいるいないで、こどもの表情は全然違う。家や学校、塾などとは雰囲気の違うサードプレイスを感じてほしいからだ。

この日は、小1から中2まで10人ほどが参加し、みんなで餃子をつくった。ワイワイ賑わうなかでも、中学生の子は、年下の子を気にかけながら、具を包んでお手本をみせている。「知っている子ばかりだから安心」と小学生の子。家族みたいな関係ができているようだ。「手作りの料理をこどもたちがおいしそうに食べてくれるのは嬉しい」と調理担当の久留主克美（くるすかつみ）さん。一方、挨拶の徹底など厳しい一面も。怒り方は、弱・中・強の3段階。「中」で効かないときは堀田泰子さんの雷が落ちる。「堀田さんに怒られるで！」といえば即座に静まるとのこと。副代表の神田貴さんは「僕もひとり親で育ち、同じような場で社交性を学んだ」と振り返る。

社交性が身につく環境

食事の準備が終わり、汗を拭きながらテーブルにつき、まんべんなく、こどもたちの顔を見て話しかける堀田さん。ボランティアで関わってくれているスタッフに感謝し、柔和だが、ちゃんと叱れる昭和の「肝っ玉母さん」が真ん中にいて、あたたかい家族のように感じられる居心地の良い場所だ。お昼は高齢の方々が楽しくランチできる「尊老（そんろう）食堂たまゆら」としても活動されている。

左からスタッフの西川さん、久留主さん、
松本さん、堀田さん、神田さん

とも淀キッチン♪

- 主　催：淀川区母と子の共励会事業部
- 日　時：毎月第2・4金曜日　17:00～19:00(原則)
- 場　所：とも淀キッチン♪
  淀川区十三東3－12－17(十三小学校前)
- 対　象：淀川区在住の小・中学生
- 料　金：100円
  (初回のみ大人同伴可 500円)
- 問合せ：090－2064－0796（堀田）

「大阪の社会福祉」は共同募金分配金を活用して発行しています。

特集

市社協 大阪市内の福祉活動の実践報告

福祉の今を知る！ 本人の身近で意思決定を支援する

～同心会 社会福祉研究奨励賞等受賞論文より～

大阪市社会福祉研修・情報センターは8月8日、大阪市内の福祉活動の実践報告「福祉の今を知る！ 同心会 社会福祉研究奨励賞等受賞論文より」を開催しました。これらの研究論文が掲載されている「大阪市社会福祉研究」は社会福祉の実践をおこなっている団体や個人が自発的に研究活動をおこない、その成果をまとめたものです。当日は、基調講演につづき、同研究誌第41号（2019年1月発行）に掲載され受賞した実践者の報告会が開かれ、144人が参加しました。

基調講演

本人の意思決定を支援する「拡大家族ネットワーク」のすすめ

第1部では「人生の最終段階における意思決定支援～認知症などを主に～」と題し、松本診療所（ものわすれクリニック）院長、松本一生さんが講演。認知症などの外来で数多くの患者と関わってこられた経験から、サポートする側として何が大切なのかと語られました。軽度～中度～重度と移っていく中にも、それぞれの状態は一様ではないこと、それぞれの時期に本人の不安があることを指摘。患者への理解を深め、寄り添うためには、傾聴することが大切であることを話されました。そして、患者を支える家族の側が完璧を求めるが故の孤立と疲弊への危惧を述べ、本人の意思決定支援のため、親族、ケアマネジャー、医師、訪問看護師、ヘルパーなどがチームとなって話し合い、情報共有しあって患者を支える「拡大家族ネットワーク」の重要性について提言されました。

豊富な診療経験に裏打ちされた松本院長の講演

コーディネーターを務めた白澤先生

報告①

本人の身近で「意思決定」を支える市民後見人活動の素晴らしさ

認知症などによる判断能力が不十分な人の「意思決定」をいかに支え、その人らしい生活を守り、育んでいくかが福祉の重要なテーマの一つ。第2部では、まず大阪市福祉局の向井順子さんが、同じ地域に暮らす住民が担当する人を丁寧に見守り、暮らしを支える「市民後見人」の活動を意思決定支援に焦点を当て検証した研究を報告しました。

研究の枠組みとして、ここ10年間の市民後見人の活動の中から、本人への意思決定支援が求められる場面として、「居所の変更」「旅行」「終末期医療」の3つを選定。抽出された42場面を厚生労働省「認知症の人の日常生活・社会生活における意思

向井順子さん

同心会とは？

大阪市における社会福祉に関する研究および実践活動の奨励を目的として、昭和58年12月に発足。同会では、研究誌「大阪市社会福祉研究」に掲載された研究論文及び実践報告から優秀作品を選び、「研究奨励賞」などを授与しています。

決定支援ガイドライン」に沿って分析・集計されました。集計の結果、「終末期医療」については難しさがうかがえるが、「居所の変更」「旅行」については、市民後見人の活動は意思実現までの支援が十分におこなわれていることが分かりました。

向井さんは、市民後見人の活動の背景には24時間体制の伴走型で活動者を支える大阪市成年後見支援センター、そして弁護士、司法書士、社会福祉士といった専門家のネットワークによるチームでの支援体制があることに言及。最後に、市民後見人の活動が制度の普及、権利擁護の仕組みの周知、ひいては地域福祉の推進にも寄与するものであることを、活動者への敬意を込めて話されました。

報告②
本人の本質的な課題に気づき、成功体験を積み重ねる支援を

路上生活者の入所施設としてセーフティネットの役割を果たしてきた更生施設は、ニーズの多様化により利用者の傾向が変化しています。そのニーズに対応するには、個々人に寄り添いながら利用者が持つ「生きづらさ」の核にあるものを見出し、本人のペースを尊重しながらスモールステップを積み重ね「社会性」を培っていく支援が大切。社会福祉法人みおつくし福祉会・更生施設淀川寮の柏原一樹さんがそのことに気づいたのは、更生施設淀川寮のAさん（20代）との関わりからでした。

柏原一樹さん

報告では、柏原さんが閉じこもりがちなAさんと一緒に散歩をしたり、ネットカフェへ行くなどの独自の余暇支援を続ける中で、彼に軽度な知的障害があることが分かり、支援の方向が定まっていくプロセスが語られました。周りも本人も認めてこなかった障がいにより、Aさんはこれまで多くの失敗を繰り返し、自信を喪失していたのでした。

柏原さんは、「一人暮らしをしたい」というAさんの希望を受け、3日間、10日間、2週間と段階的な一人暮らし体験をサポート。外部とのコミュニケーションの機会も増やしながら、グループホームへの入居、作業所への参加までの支援のプロセスを丁寧に紹介されました。「施設で生活しているからこそ、日々の密な関わりができ、パーソナリティや本質的な課題に気づくことが可能になり、それをベースに本来的な就労支援に繋げられた」と更生施設の強みと新たな役割を語りました。

報告③
安心して暮らせるまちづくりに向け、職員全員が認知症サポーターに

最後に、前大阪市北区役所福祉課長の武市佳代さんが登壇。職員全員が認知症サポーターになった地域福祉への取組みを報告しました。北区では「認知症サポーター養成講座」を人権研修として位置付け、全職員が認知症への理解を深め、家族を含む当事者の方々にとって行きやすく、相談しやすい窓口業務をめざしています。また、区民の目に見える形で認知症サポーターとしてオレンジリングを身に着け、すべての人に安心して区役所に来てもらえるようにしたいとの願いを込めて、平成29年度より全職員の研修をおこなってきました。

武市佳代さん

養成講座の講師には、地域包括支援センターの専門家に加えて、地域で活動するキャラバンメイトにも依頼。そのことで、民生委員活動の知らなかった側面、地域で活動する人々のリアルな姿に触れることができたのも成果の一つだったと報告されました。

北区の傾向として、高齢者虐待事例のうち当人の財産を親族が不当に処分するといった経済的虐待が市平均よりも高いこと、経済的虐待を受けた方の約3分の2に認知症の症状があったことに言及。外部からは気づかれにくい経済的虐待の救済のためにも、認知症を少しでも早く発見し、サービスにつなげることが今後の課題であることが述べられ、全職員が認知症サポーターになる試みを継続していくことの大切さを語られました。

実践報告のコーディネーターを務めた国際医療福祉大学大学院教授・大阪市立大学名誉教授の白澤政和さんが、それぞれの研究の評価ポイントをまとめ、「認知症、大人も含めた引きこもりなど、多くの問題が実は家族という関係でつながっているので、それぞれの専門家だけでなく、まわりの全員がサポーターとして参加することが大事」といった、今後の福祉活動への提言を語られました。

【 大阪市社会福祉研究 第41号 受賞・実践報告 】

報告① [研究奨励賞]	テーマ「意思決定支援のプロセスにおける市民後見人の役割の検証」向井順子／村井智子／川平昌美／横野雅子／石本佳那
報告② [会長賞]	テーマ「更生施設が担う役割と機能の変化～更生施設淀川寮の取り組みを中心に～」柏原一樹
報告③ [会長賞]	テーマ「大阪市北区役所における職員の福祉教育～全員が認知症サポーターになる試み～」武市佳代／小阪勉／内村ひとみ／高田郁子／酒井礼子／田中希久央／坂上里絵

「大阪の社会福祉」は共同募金分配金を活用して発行しています。

大阪市社会事業施設協議会

人材確保・定着に向けた取組み「施設と学校との懇談会」

「福祉分野の人材確保に向けて」～学生が思うこと、施設が思うこと～

昨今の福祉分野の重要課題となっている人材の確保、育成、定着において、特に、新規学卒者の確保、育成、定着については喫緊の課題となっており、大阪市社会事業施設協議会（以下、施設協）の経営委員会を中心に、大阪市福祉人材養成連絡会と大阪市社会福祉協議会の共催で課題解決に向けた取組みを展開している。その一つとして、学校の教員や福祉分野の学部等に在学中の学生と施設職員との懇談会を7月31日に開催した。懇談会には施設代表者、大学、専門学校、高校から62人の参加があり、施設のイメージや福祉の魅力等について直接教員や学生から聞き取り、意見交換をおこなった。

学校側の学生が福祉分野への入学を決めた理由として、「実習に行った際、リーダー的な存在の職員にお世話になり、とてもいい雰囲気だった」「中学生の時の特養での職業体験で、あたたかさを感じたから」などの意見があった。また施設のイメージとしては「しんどく、不安定な給与」「休みがとりにくい」などの意見もあった。

今回の取組みを通し施設側としては「キラキラ輝いているこどもたちへ施設の良さを発信する必要性や手法の工夫」、また「小・中学校での福祉体験の推進」等、さまざまな気づきのある有意義な時間となった。

今後も施設協では、学校とのネットワークづくりを拡充し、施設への就職につなげるための効果的な福祉人材確保の取組みを展開していく。

▲施設協の倉光慎二会長のあいさつ

◀各種別の施設代表者と教員・学生が和やかに懇談

第62回大都市社会福祉施設協議会

大都市の社会福祉施設が目指す未来

第62回大都市社会福祉施設協議会（札幌市大会）が7月25日・26日、京王プラザホテル札幌で「大都市の社会福祉施設が目指す未来」をテーマに開催され、政令指定都市の社会福祉施設代表者、社協役職員など214人が参加。開会に先立ち開かれた運営協議会では、本大会の運営や前回福岡市大会の椎葉亮実行委員長による経過報告及び処理報告について承認された。また、過去の大会に存在していた「地域福祉研究会」の復活について提案があり、放課後児童クラブに関する事項やこどもの貧困対策等について協議する場として、現在の研究会構成と併せて、今後検討されることとなった。

指定都市の施設代表者等が集まり意見交換

開会式に引き続き、公立大学法人札幌市立大学の中島秀幸理事長・学長による基調講演「AIで拓く福祉の未来」がおこなわれ、各社会福祉法人において人材の確保・定着が課題となっている中、課題解決の1つの手段として着目されているAIの導入ついて、人間とAIの得意分野を分析し、介護や看護において、AI・ITが可能にする新しい社会システムについて話された。

その後、経営、高齢福祉、児童福祉、保育福祉、障がい福祉、生活福祉の6つの種別研究会で、それぞれの議題について討議され、国への要望事項としてまとめられた。

2日目は、総会・全体報告がおこなわれ、初日の運営協議会の報告および各種別研究会の報告とともに、本大会要望書の取り扱いについて確認された。引き続き、オテル・ドゥ・ミクニの三國清三オーナーシェフによる特別講演「心を豊かにする「食」のチカラ」の後、次期開催都市である川崎市からのあいさつで盛会のうちに幕を閉じた。

いざと言う時の119番通報!!

大阪市消防局では、119番通報の手段として、音声による119番通報以外に、音声による通報が困難な方の119番通報として、FAXによる通報、eメールによる通報（令和２年３月31日に運用終了）そして、NET119による通報があります。

その通報手段の中でも、非常に簡単な操作で正確に通報できるNET119は、大阪市内に在住、在勤もしくは在学の方で聴覚や言語機能に障がいのある方及び音声による通報が困難な方が、携帯電話やスマートフォンなどのインターネット接続機能を利用して119番通報をすることができるものです。通報時にGPS機能による位置情報や、画像を送ることができ、チャット機能を利用して詳細な症状などを伝えることもできます。また、いざという時のために練習通報をすることも可能です。

NET119は登録制で、登録費用は無料ですが、通信料は必要となります。

もしものときのお守り代わりに登録されてはいかがでしょうか。

登録にあたってはentry_27100@entry06.web119.infoに空メールをお送り頂くか二次元コードを読み取り、空メールをお送りください。

【お問い合わせ先】
大阪市消防局警防部司令課
（指令情報センター）
電話：06-6582-2854
FAX：06-6582-2864
メール：net119@city.osaka.lg.jp

市社協 令和元年度 大阪市社会福祉大会

日　時：令和元年 10 月 30 日(水)　午後２時～４時
会　場：大阪国際交流センター　大ホール
（大阪市天王寺区上本町８－２－６）
内　容：第１部　式典　　第２部　講演

講演内容

講　　師：金澤　泰子さん　（書家）
タイトル：「ダウン症の娘（こ）と共に生きて」

金澤翔子の母。
1943 年生まれ、明治大学卒業。
書家　柳田流家元に師事。
1990 年、東京・大田区に「久が原書道教室」を開設。
著書に「愛にはじまる」「天使の正体」「翔子の書」「涙の般若心経」その他多数。
久が原書道教室主宰。東京芸術大学評議員。日本福祉大学客員教授。

問い合わせ先：大阪市社会福祉協議会　総務課
☎06-6765-5601

風をよむ

一人暮らし高齢者を支援する際に介護支援専門員が感じる困難感

大阪市立大学大学院　生活科学研究科　教授　岡田 進一

現在、わが国は超高齢社会であり、一人暮らし高齢者が増加している。平成27年の国勢調査によると、大阪市の一人暮らし高齢者世帯は、65歳以上の全高齢者世帯の42・4％であり、高齢者世帯のほぼ半数近くが一人暮らし世帯となっている。今後、一人暮らし高齢者世帯の増加は、さらに続く可能性が高い。また、超高齢社会では、75歳以上の後期高齢者の割合も高くなり、一人暮らし高齢者で認知症となる割合も高くなる。

大阪市立大学では、一人暮らし高齢者に対する支援実態調査をおこなうとともに、「一人暮らし高齢者支援で介護支援専門員が感じている困難感に関する調査」をおこなった。調査対象者は、大阪府下の地域包括支援センターや居宅介護支援事業所の主任介護支援専門員や介護支援専門員である。調査の分析結果から、回答者から得られた困難感の特徴を大きく2つに分類することができた。

その1つは、「対人支援を進めていく際に感じる困難感」であり、もう1つは、「人的資源不足のために感じる困難感」であった。1つ目の困難感は、一人暮らし高齢者に対する相談支援を進めていく際に感じる困難感であり、訪問拒否、サービス導入拒否、他者への不信感などで生じる困難感であった。2つ目の困難感は、一人暮らし高齢者の支援を進める際に生じる人的資源不足であり、緊急時やさまざまな対応をおこなう際に必要となるキーパーソンや入院時に必要となる保証人を見つけることができないという困難感であった。

この課題解決については、事例の個別性もあり単純ではないが、研修等による介護支援専門員の力量向上だけでなく、主任介護支援専門員によるスーパービジョンの実施、地域包括支援センターの後方支援、地域ケア会議の活用、人的資源不足を補う新たな制度設計や制度の見直し等、複合的な解決策を模索しながら、この新たな課題に対応していくことが求められる。

「大阪の社会福祉」は共同募金分配金を活用して発行しています。

大阪の社会福祉 vol 772
令和元年9月発行（毎月1回発行）
発行／社会福祉法人 大阪市社会福祉協議会
編集・発行人／西嶋 善親
〒543-0021 大阪市天王寺区東高津町12-10（大阪市立社会福祉センター内）
Tel.06-6765-5601 Fax.06-6765-5605 http://www.osaka-sishakyo.jp

はじめまして！こんにちは♪

NPO法人のご紹介

▷61◁

障がいのある人と共に生きる地域社会の実現に向けて

NPO法人 地域自立支援推進協議会JOTO

「障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律」第89条の３により、障がいのある方への支援体制の整備を図るため、関係機関等による「地域自立支援協議会」を市町村が設置することとなっており、大阪市においては各区に１ヶ所ずつと、市に１ヶ所設置されています。

城東区においては、平成20年４月に城東区地域自立支援協議会が設置され、障害福祉サービス事業所、相談支援機関、当事者及び当事者団体、家族等のメンバーで構成され、運営をおこなっています。活動していく中で、城東区において障がい者の地↙

障がいのある人への支援のため募金活動にも取り組む

↘域生活を支援するため、城東区地域自立支援協議会が協議し計画した事業を具体化し、実行していくためにＮＰＯ法人の設立の議論が進んでいき、平成23年４月にＮＰＯ法人地域自立支援推進協議会ＪＯＴＯを設立しました。

現在は、大阪市から委託を受けた「城東区障がい者基幹相談支援センター」、指定特定・一般・障害児相談支援事業「城東区障害児・者相談支援センターWAKUWAKU」の相談支援事業を運営しています。障がい者基幹相談支援センターは、大阪市内の各区に１ヶ所ずつ設置されています。業務の内容としては、障がいのある方やその家族等からの相談に応じて、福祉サービスの利用援助、社会資源の活用、ピアカウンセリング、権利擁護のために必要な援助、専門機関等の情報提供をおこなうことにより、地域における生活を支援します。

さらに、城東区地域自立支援協議会は、運営会議、事務局会議、相談支援部会・地域活動部会・当事者部会・就労支援部会・居宅介護部会・地域生活部会・児童部会の７つの部会で構成されています。城東区地域自立支援協議会の運営を通じて、関係機関との連携を深める等により、地域における相談支援体制の強化に努めています。

住所536－0005
大阪市城東区中央１－８－30
パンション真紀２階
Tel 06-6934-5858
Fax 06-6934-5850
HP http://wakuwaku-joto.net

要介護認定調査員募集

介護支援専門員の資格があれば経験不問です

賃　金：日額 **11,160**円
勤務日：週５日(月～金曜日　希望により週２～４日勤務も可)
※土曜日勤務希望の方は、相談に応じます
時　間：午前９時～午後５時30分
問合せ先：**06-6765-5631**［大阪市社会福祉協議会 福祉事業課・田口］

立ちどまらない保険。
MS&AD 三井住友海上
三井住友海上の安心
GK
クルマの保険　すまいの保険　ケガの保険
www.ms-ins.com

大阪府共同募金会からのお知らせ

◈ 寄付金助成施設などの訪問 ◈

あなたの寄付金が役立てられているところを訪問しませんか

大阪府共同募金会では、役員・評議員・運営協議会委員で構成する調査指導部会活動として、毎年、助成を受けた施設、団体、社会福祉協議会などを訪問し、共同募金の活用状況の調査、住民への公表等の指導をおこなっています。赤い羽根データベース「はねっと」で大阪を含めた全国の配分事業をご紹介していますが、大阪府共同募金会では『もっと知りたい知らせたい』キャンペーンの一環として、寄付者である府民のみなさまにもっと助成事業を知っていただこうと、今年もこの調査指導部会活動に同行参加される方を募集しています。

詳しくは大阪府共同募金会ホームページをご覧ください。

赤い羽根おおさか　検索

申し込み・問い合わせは大阪府共同募金会事務局
〒542-0065 大阪市中央区中寺１－１－54
TEL ０６－６７６２－８７１７まで